

現場の先生方と連携して研究するということ ③

思いもかけず頂いたこのたびの連載も、早いもので最後の回となり、気づけば3月という節目の時期を迎えています。そこで、今回は、私自身が本年度を振り返りながら、「現場の先生方と連携して研究すること」について、思いを巡らしてみたいと思います。

1) “スペシャリスト”の先生との出会いから

皆様は、どのような経緯で、現場の先生方と連携されているのでしょうか？私の場合は、これまでを振り返ると、その多くは授業実践に関わる連携で、今年度も、先生方のご協力をいただき、いろいろな取り組みに挑戦してまいりました。

例えば、私は大学でキャリア教育に関する授業等を担当しているのですが、常々、キャリア教育に“多様性”の視点が希薄であることに課題を感じておりました。そのため“多様性理解”を基盤としたキャリア教育の授業づくりを検討してきたのですが、その過程で、性やジェンダーの問題について取り組まれている、中学校社会科の先生に出会うことができたのです。先生の貴重なお話から、多くの学生が“多様性”について考え、キャリアを探究する上で重要な機会となったことは、言うまでもありません。

ちょうど、本年度の国際キャリア教育学会（IAEVG）のテーマが「インクルーシブ社会のためのキャリアガイダンス」であったこともあり、このような取り組みを含む、一連の教育実践について発表することもできました。先生のご協力なしでは得られなかった成果であり、この場を借りて、改めてお礼を申し上げたいと思います。

先生方と連携を行う場合には、「〇〇について、ともに研究を行いたい」といった出発もあると思いますが、それほど、かしこまって考える必要はないかもしれません。スペシャリストの先生方との出会いを大切にしていくことが、結果的に、研究へと繋がることもあるのではないのでしょうか。そのようにして得た先生方との出会いは、私にとって、かけがえのない宝物となっています。

2) 現場の先生方の“課題意識”とともに

教員養成大学に勤務していると、現場の先生方から、現実の教育課題を、研究課題としていただく場合もあります。数年前から、特別支援学校の先生方や関連する研究者の方と仕事をご一緒する機会があり、特別支援学校において、キャリア教育の実態把握が求められていることを知りました。そこで、昨年には先生方と共同で、全国調査を実施し、今年度はその結果分析にも取り組みました。

教育現場には、先生方でないと気づくことのできない重要な課題が山積しています。これらの課題は、一人で探究することは難しいかもしれませんが、同僚の先生方や研究者を巻き込むことで、解決への道が見えてくる可能性もあるのではないのでしょうか。

約 20 年前になりますが、初めて米国の学校にキャリア教育の調査に伺った際には、学校の先生方と大学の研究者が、ともに授業を作り、カリキュラムについて意見を交わされていました。その光景は、私にとってとても新鮮で、今でも時々、先生方の笑顔や、明るい場の雰囲気を思い出します。「学校と大学が連携することは、すごく楽しくてワクワクすることなんだ！」そんな風に、若かりし私は感じたのだと思います。そのような経験からも、私は、若い先生方や研究者の方に、研究の中での“ワクワク”感を、大切にしていきたいと願っています。

3) “知識を創り出す” 連携・共同研究をめざして

実は、時々、「研究ってなんだろう？」と思うこともあります。若い方々と同じように、年齢に関係なく、「これは教育実践研究と言えるのかな？」「果たしてこのような手法で理論化できるのかな？」など、悩むこともあるのです。そんな時、私はいつも“study”と言う単語を思い出します。“study”は中学生の時に「勉強する」と学習しましたが、大人になり、「研究する」という意味も、よく理解できるようになりました。“study”という言葉は、ラテン語の *studeo* (打ち込む)、*studium* (没頭)などを語源としているそうです。その語源の意味するように、教育実践にも、教育研究にも、一生懸命に取り組んでいけばよいのではないのでしょうか。

もちろん、研究手法の妥当性や論理性など、「研究」においては欠かせない要素はたくさんあります。しかし、実践者と研究者は乖離するものではなく、同じ“study”する存在として、知識を生み出せる同志だと確信しています。

益子(2007)は、「知識生産型」として学校や教師を認識し、研究者が実践的な問題解決過程に対して支援などの方策で関係を構築すると同時に様々な実践者の状況を理解することが、新しい研究方法を指向する上では重要な態度であると考え」と述べており、実践にとどまらず、知識の生産を主眼とする研究の必要性を示唆しています。

このような方向性もふまえた上で、4月から始まる新しい年度では、ともに知識を創り出す連携・共同研究をめざしていきたいと考えています。そして、皆様とともに、私自身も、自分自身をブラッシュアップしながら、今後の研究に取り組んでいければと思っています。

引用文献

益子典文 (2007) 「学校／教師との共同研究の進め方:研究方法に関する一考察」
『科学教育研究』 31(1), 54-55. (<https://doi.org/10.14935/jssej.31.54>)

(奈良教育大学 河崎智恵)